

非核奈良

森本孝順(唐招提寺長老)筆

2011年
8月15日
第96号

発行 非核の政府を求めると奈良の会

〒630-8213 奈良市登大路町3-6 大和ビル4F

奈良合同法律事務所 気付

電話0742-26-2457 FAX26-3010 郵便振替01020-1-56459

私たちは非核の五項目を
実行する政府を求めます

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

東日本大震災、いまやヒロシマ・ナガサキと並んで「フクシマ」と書かれる原発の事態。収束のめどさえたたない世界史的な不祥事になりました。

この事態を「満州事変」から一五一年にわたる戦争の後、敗戦に至った七、八〇年前の日本の政治状況と、とてもよく似ているという主張があちこちで見られます。

例えば地震学者の石橋克彦神戸大名誉学教授はこう書いています。

「半藤一利氏の『昭和史 一九五一―一九四五』(平凡社)を読むと、日本がアジア太平洋戦争を引きおこして敗戦に突き進んでいった過程が、現在の日本の「原発と地震」の問題にあまりにも似ていることに驚かされる。「根拠のない自己過信」と「失敗したときの底の知れない無責任さ」によって節目節目の重要な局面で判断を誤り、「起きては困ることは起こらないことにする」意識と、失敗を率直に認めない態度によって、

戦争も原発も、さらなる失敗を重ねた。そして、多くの国民を不幸と苦難の底に突き落とした(落としつつある)」「(まさに「原発震災」だ」『世界』五月号)。

日清・日露戦争の明治時代は「栄光の時代」だったというのは日本政府の立場です。一九六八年「明治百年」を政府主催で祝いました。HNKが一昨年から年末に放送している「坂の上の雲」も「明治の栄光」を大金をかけて宣伝しています。

しかし日清・日露戦争は朝鮮を支

半藤一利さんは『文藝春秋』の編集長もつとめた方で、最近では「昭和史」の専門家として評判の著名な文筆家です。「近代日本百四十年の歴史の栄光と悲惨ということを、大枠であてはめていえば、明治時代には「栄光の」と、戦前の昭和時代には「悲惨な」と、それぞれ形容詞をつけて呼ぶことができるでしょう」と書いています(『あの戦争と日本人』文藝春秋、二〇一一年)。

しかし日清・日露戦争は朝鮮を支

「満州事変八〇年」、 「太平洋戦争七〇年」、 そして「フクシマ」と

中塚明

配するための戦争でした。この二つの戦争をへて朝鮮は日本の植民地とされたのです。去年は「韓国併合一〇〇年」、歴史の節目でした。「朝鮮の独立」のためと公言した日清戦争で、朝鮮の国王を擒(とりこ)にするために戦争の第一撃で日本軍が朝鮮の王宮を占領したり、これに抗議して立ち上がった数万の朝鮮人を皆殺しにしたり、日本の意向に従わないからといって国王の后を王宮の寢室にまで襲って殺害する、こんなひどいことを明治の日本政府・日本軍はしてきたのですよ。しかもこの真相をひた隠しにしてきました。この動きに新聞も同調するだけでなく加勢すらしてきました。

この無責任さが、満州事変以後の日本を生んだではありませんか。こんな事実を、あるいは教えてもらわなかったから知らんワ、と試してみたり、あるいはそれは「帝国主義時代のこと、似たようなことは他の国もやってる、日本だけのことじゃない」と、少しは知ったかぶりに、きれいに忘れてしまっているのが今の日本ではありませんか。

フクシマを満州事変以後の日本になぞらえるだけでは、また別の「フクシマ」を「この日本」に生むのではないか。私はそれを深く恐れています。(筆者は旧代表・当任世話人)

非核平和の集いと奈良の会総会

「原発は核兵器開発から始まった」

奈良の会は、7月3日、第25回総会と「非核平和の集い」を開催しました。

総会では、今事務局長が、この1年間の会の活動のまとめと世界と日本の動きについて報告しました。その中で、住民保護条例の中の「核攻撃対処条項」について県下各自治体がどのように取り組んでいるかを中心に自治体アンケートを行い、72.5%の回答があったことが報告されました（詳細は、当会のホームページを）。また、昨年のNPT再検討会議後、核兵器廃絶交渉を望む声が高まり、米ロが戦略核兵器削減条約を批准するなどの動きが見られる一方、菅首相の「核抑止力は我が国にとって引き続き必要」との発言、日本政府の「能動的な平和創造国家」・「動的防衛力の整備」計画、米の未臨界・新型核実験の強行など、世論に逆行する動きも強まっていることが報告されました。さらに、3.11の東日本大震災と福島原発の事故により、原子力政策の見直しが必要になっていることが指摘されました。

役員選出では、結成時から中心的に活動された中塚明代表（奈良女子

大学名誉教授）が退任し、新代表に吉田恒俊常任世話人（弁護士）が選ばれるなど新たな役員が選出されました。

「フクシマから『核抑止』を問う」

―豊下梢彦さんのお話

続く「非核平和の集い」では、約50人の参加者を前に、「フクシマから『核抑止』を問う」と題して、豊下梢彦さん（関西学院大学法学部教授・国際政治論専攻）が講演しました。

14年も前の1997年に神戸大学の石橋勝彦教授（地震学）が「大地震が原発を損傷し、同時多発的な大事故が発生する危険性」を指摘し、05年の衆院予算委員会公聴会でもそのことを公述されていた。

原発は、そもそも核兵器開発から始まっており、チェルノブイリ事故（86年4月）に衝撃を受けたゴルバチョフが、「最も小さな核弾頭でも、放射能の強さの点で三つのチェルノブイリ事故に相当する」と核戦争につながる軍拡競争の停止を決意し、



それがINF全廃条約にもつながっていった。

チェルノブイリを上回るレベル8とも言われるフクシマの「惨状」にもかかわらず、原発へのテロ攻撃の危険性は指摘されても、なぜ核兵器の存在それ自体を問う声が上がらないのか。その背景には、北朝鮮や中国の脅威に対する「核の傘」＝核抑止論が国民の潜在意識としてあるからだ。

現在の日本のミサイル防衛システムは役に立たない。北朝鮮が本気で日本をミサイル攻撃するつもりなら、MDシステムの最大の弱点である日本海側の原発を狙うに違いない。我が国には有効に対処できるシステムは未整備であり、原発にも対処の設

計基準は設けられていない。PAC3の配備状況をもても原発を守るようには配備されていない。

ジュネーブ条約追加議定書（77年採択）が「危険な力を内蔵する工作物及び施設、すなわちダム、堤防、原発は、これらの物が軍事目標である場合であっても、これらを攻撃することが文民たる住民の間に重大な損失をもたらすときは、攻撃の対象としてはならない」（56条）し、これらを復讐の対象とすることも禁止している。

「危険な力を内蔵」と攻撃される対象を規定しているが、逆に攻撃する側の兵器が、住民の間に重大な損失をもたらすような「危険な力を内蔵」すること自体を問うものと捉えるべきで、56条の規定は「当然、住居地域での核兵器、劣化ウラン弾、化学および生物兵器の使用も禁止されていると解釈できる」ばかりでなく、化学・生物兵器禁止条約が「残虐である」という理由で禁止されていることからして、核の開発、保持、脅し、使用も犯罪行為として禁止する方向に踏み出すべきである。

論理的結論として、フクシマが問うていることは、原発という「核の平和利用」は全廃すべきであるとともに、核の軍事利用（核抑止）そのものも廃止されるべき、ということである。 文責・長畑学（事務局）

代表就任ご挨拶



吉田 恒俊

奈良の会は当初から代表は選んでおりませんでした。その理由は中塚先生が権威主義的な運営を好まなかったことと、実際には中塚先生を中心にしてみんながまとまっていたからだろうと思います。約10年ほど前に規則を改正して代表を設け、初代代表に正式に中塚先生が就任されました。私も当初から常任世話人兼事務局として参加してきましたが、偉大な中塚先生の後任というのは誠に荷が重いです。先生の足跡を汚さないように努力いたしますのでどうかよろしくお願い申し上げます。

フクシマに問われていること

山室 光生

「父さん、すぐテレビを見る。」
3月11日午後4時近く。仙台に住まっている二男を気づかった、長男からの電話でした。すぐ仙台へかけた電話に二男がでたとき、こちらからは声が出せません。「：けが、ないか」。続いて福島第一原発のことが伝わってきました。でも、「福島原発で事故発生。避難所などで情報集めよ」とメールす

るのが精いっぱいです。大地震直後、余震の続くなかでは、原発で問題が起きたからといって安全な所まで避難する方法はなく、大問題が起きていることを知ることで難しいようでした。

講演の始めに、石橋神戸大学教授の衆院公聴会での公述（「日本が地震活動期に入っていることに、『原発震災』の起こる危険性は大きい」05・2・23）が紹介され、地震と共存する文明について語られました。とても大事なことだと思います。「原発震災」をたんに効率や利便性を求めての電力問題ととらえるのではなく、自然の摂理にそった文明づくりとして考えていかなければなりません。

そして、講演の終わりでは、何世代にもわたる深刻な被害をもたらす核の「平和」利用（原発）は当然全廃すべきだが、では、核の軍事利用は？と問われました。

非核をめざす運動の意味の重さを改めて教えていただきました。

非核平和の集い 参加者アンケートから

アンケートは10通頂きました。いずれも講演には好評で、核エネルギーは制御できない、軍事利用も平和利用もやめるべきだとの意見など、環境破壊の原発をなくしてクリーンエネルギーを主張するものがほとんどでした。

いま歌おう 未来のために

Peace Concert in NARA2011

日時 2011年9月18日(日)
午後2時開演
場所 やまと郡山城ホール大ホール
入場料 一般3,000円
18歳未満・障がい者1,000

事務局長 今 正秀

今年、満州事変から80年、アジア太平洋戦争開戦から70年にあたります。私たち日本人の多くにとって戦争の記憶は遠ざかる一方ですが、日本の侵略の被害を受けたアジアの人々の間では、教育を通じて過去の事実がきちんと認識されています。そのギャップが「歴史（認識）問題」として噴出するわけですが、私たちがアジアの人々とともに未来を築いていこうとするなら、目を背けたくないような過去をも凝視することが必要です。そんな思いから、混声合唱組曲「悪魔の飽食」を中心としたコンサートを開催することにしました。準備を進めている中で東日本大震災が発生。それ以後は、すべてが震災との関連なしには話れないような

雰囲気となりました。実行委員会でも、「いま、なぜ『悪魔の飽食』なのか」との疑問が出されました。

私たちはこう考えました。今回のコンサートの趣旨は、未来を築くために過去を見据えることであり、それ自体はゆるがせにできない。一方、「悪魔の飽食」は優秀な医師たちが、お国のためにという理由で、自らの持つ能力を化学兵器・細菌兵器開発に捧げ、そのために中国人や朝鮮人などの捕虜に生体実験を行ったことを告発しています。原発問題も根は同じではないでしょうか。国策としての原発推進、それを支えるために安全神話を振りまき、安全だから危機的事態への対応は考えなくてもよいと受け入れてきた構図…。

「わたしたちは信じよう 人間の英知と良心を 科学を悪魔に渡してはならない人間の英知が破れぬため わたしたちは力を合わせよう」「誤ちを隠せば いつか同じ誤ち 悲惨な記憶が風化していく 歴史の教えを忘れぬため わたしたちは力を合わせよう」：「悪魔の飽食」のこの歌詞は、いま、新たな重みをもって私たちに迫ります。満州事変勃発の日、過去と現在、そして未来を結んで、私たちは歌います。是非聴きに来て下さい。

原発についての 注目すべき2冊

木村 有子

福島原発の爆発という事態が起きて4ヶ月、被害が拡大している中、いずれも自治体が出した本を紹介する。

一冊目はチェルノブイリ事故の後、イングランドのリーズ市がリーズとブラッドフォード両市の市議会の委託で制作した「放射能雲の下のリーズとブラッドフォード」(500円)で、重大事故への対処の仕方を解説した入門ブックレット。問題のヘイシヤム原発は両市から83〜90キロ、セラフィールド原発からは135〜146キロも離れている(福島第一原発から東京まではおよそ100キロ)。日本では各原発を中心に100キロで円を書くと日本の半分以上が中に入ってしまうのに、放射能に対する防災計画は「安全」という神話の下に何もなかった。

もう一冊は福島県の飯館村が震災直後に出版した「までの力」(までのいとは東北地方の方言で丁寧、心を込めての意。2500円)。「までのい」特別編成チームがこの

自己紹介



山室 光生

皆さま、こんにちは。新しく常任世話人兼事務局員になりました山室です。小学校に勤め、3年生を担当しております。子どもたちの生きる、いまと未来とが、より平和であることを願っています。これからどうぞよろしく願います。

村の美しい姿を出版にこぎつけた丁度その時、大震災と福島原発の爆発が起き、発行は震災から1ヶ月後の4月11日となった。原発は村が積み上げてきた全てを破壊した。しかし、そんな中でこの8月「未来への翼」プロジェクトを実行する。中学1、2年生20人をエコライフで有名なドイツ・フライブルグに、村が費用を負担して視察に派遣する。

(常任世話人)



◇ 私のひとり言川柳

よし子

ヒロシマとナガサキそしてフクシマか

故郷(ふるさと)を捨てねばならぬ無味無臭

不条理の単位マイクロシールド

☆活動日誌 (2011年)

5月18日 第142回常任世話人会

6月15日 事務所会議

7月3日 総会と非核平和の集い

7月6日 第143回常任世話人会

☆今後の予定

8月24日 事務所会議

9月26日 第143回常任世話人会

非核平和の集い 原発違法判決と私 (仮題)

日時 12月10日(土)午後1時30分

場所 次号及びチラシでお知らせ

講師 元裁判官
井戸謙一弁護士(確定)

☆編集後記

「フクシマ」は国際語になりました。広島原爆の20倍もの死の灰を降らせた東電の原発は未だに収束の見通しも立たず、逆に肉、茶、米など全国的に被害を拡大しています。菅首相は「原発に依存しない社会を目指す。」というけれど、もう一步踏み込んで「脱原発」を明言してほしい。「究極的な核兵器廃絶」と未だに「究極的」と言って核廃絶を先延ばしにしていることも不満です。安全神話を振りまいてきた①東電、②経済団体、③政治家、④御用学者、⑤御用マスコミなど「原子力村」の人々は、今は目立ちませんが、これから開き直ってくると思います。気を引き締めましょう！

12月の平和の集いには原発違法判決を下した元裁判官の井戸弁護士を招きます。乞うご期待！

(編集担当 吉田恒俊)